



# LIBRARY

いわき総合高校図書委員会 平成30年5月号

## 今月のオススメ📖



≪吸血鬼伝説≫ 著者：ジャン マリニー 中村 健一 訳

ギリシャ神話の昔からヨーロッパの深層にうごめいてきた「吸血鬼伝説」。その成立は一体何なのか？ それを歴史、宗教、文学、映画、吸血鬼事件等で読み解く。

私自身、吸血鬼等のオカルト物が非常に好きなのだが、吸血鬼に対する認識は少しばかり浅かった。しかし、この本はそんな私を変えてくれた。当時の絵画や文章が載っており、当時の様子を伺い知る事が出来る。今となっては映画や小説のネタとして多く使われてきた「吸血鬼」という概念。この本を読み、今一度自分の持ち合わせた知識と照らし合わせてみてはどうだろうか。きっと新しい発見が出来るであろう。(TS)



## ～図書委員会から～

### 📖 図書日より『LIBRARY』について

『今月のオススメ』は、毎月図書委員が“私のとっておきの1冊”を紹介するコーナーです。紹介した本をぜひ、学校図書館で借りて読んでください。

また、『先生のオススメ』も毎月先生方の“オススメ”を紹介します。各先生方の一押しの本を紹介していただきますのでお楽しみに♪ 今月は美術の石井先生ですが、来月の先生はどなたでしょう？

### 📖 昼休みの貸し出しについて

金曜日昼休みは混雑します。なるべく金曜日の利用は避け、他の曜日に借りに来てください。

### 📖 図書館利用のマナーについて

図書委員のカウンター業務は13時15分で終了です。昼休みの貸し出し時、5校時の予鈴が鳴ってからカウンターへ来る人がいます。本校はチャイム to チャイムです。チャイムと同時に授業が始まります。教室移動もありますので、時間を守ってください。

また、借りた本は各自でしっかり管理し、教室に放置したり、又貸ししたりするのは厳禁です。図書館内で騒いだり、大声でおしゃべりすることも厳禁です。マナーを守り、みんなが気持ちよく利用できる図書館にしましょう♪ ご協力よろしくお願いいたします。

開館時間 8:35～16:40

(※1人5冊 貸し出し期間2週間)



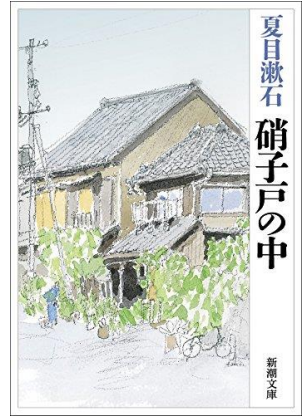
# 先生のオススメ

石井 克典 先生

◀ <sup>からす</sup>と <sup>うち</sup> **硝子戸の中** ▶ 著者：夏目 漱石

漱石晩年の日常における様々なエピソードを書き綴った随想集。自分の人生と世の中を淡々と眺め、深い哀しみやあきらめが感じられる。その一編にある女性から自作の講評を依頼された折に語った言葉が印象的である。人と人の関わり、師弟関係において、上滑りの円滑を主位に置く体裁の好い事ばかり言い合っていてはいつまでも互いを啓発されず利益を受ける訳もない「社友」であってはならないと説く。

「人生、互いにおもいきって正直に、真面目に自分の本心、弱点をさらけ出す事が大切だ。教師と生徒の関係においてはなおさらのこと。互いに、何か言ったら黙ってはず、笑われないか、恥をかかないか、失礼で怒られはしないかと遠慮して自分を隠すべきではない。そうでなければ現状維持でしかなく共に向上する事は無いのだから。」漱石のことばが心に響きます。



## ☆生徒へひと言☆

自分とは異なる生き方、考え方を知り、多様な世界を身近に手軽に体験できるのが読書です。古典的な名著と言われる読書を通して自分の生き方の原点を、早期に発見する事を願います。

## ◆図書日より編集部より◆

みなさんに図書のアンケートで好きな作家は？ というアンケートを取ると、今の流行作家とならび夏目漱石は必ず上位に入ります。没後 100 年以上を経ても、今なお読み継がれているのですからスゴイですね。石井先生オススメの『硝子戸の中』は、“人間漱石”を知る上では大変興味深い作品です。漱石ファン必読の本ですよ。他にも漱石に関する本はたくさん出版されています。なかでも、普段の漱石を知る門下生(弟子)や奥さん、ご子息など近い方が書かれたものもオススメです。

『漱石の思い出』は、漱石の長女である筆子の夫松岡譲(漱石の門下生)が鏡子夫人に聞き取りをして書いた「見聞録」です。家庭での漱石の姿が垣間見え、小説とはまた違った漱石に出会えます。漱石は第一子の筆子が生まれた翌年、文部省(現文部科学省)の命を受けロンドンへ留学します。その留学は過酷なものだったようです。「学校へ正式に行くには金がかかるし、時間の無駄」ということで貧民窟のような安下宿に住み、何もかも切り詰めて本を買って勉強したそうです。日本に残った家族もまた経済的に大変だったようです。

最近、漱石がロンドン留学中に友人へ宛てた直筆の絵葉書が見つかったと話題になりました。そこには、日本人学生が多いドイツをうらやんで「僕ハ独リボツチデ淋イヨ」と書いてあったそうです。鏡子夫人へも、筆不精の夫人を責め立てるような手紙を出しています。孤独で過酷なロンドンでの生活が漱石を病氣(神経衰弱)にしたようです。

その病氣が原因で家族を苦しめたこともあるようですが、元来は傲慢さや身勝手さを微塵も有しない、稀にみる心のあたたかい物解りのよい優しい人だったと、家族は語っています。

また、松山時代は親友の正岡子規を数か月も居候させ、小遣いなどもやっていたとか……。当時の田舎では英文学出身の文学士というので、校長より高給をもらっていたそうです。ちなみに、あの有名な『柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺』は、療養生活の世話(居候)、奈良旅行の旅費を工面してくれた漱石に対して、漱石の作である「鐘つけば 銀杏ちるなり建長寺」の句への返句(お礼の句)として子規が漱石へ贈ったものといわれています。他にも興味深いエピソードが満載です。漱石の奥さんは、ソクラテスの妻と並び称されるほどの悪妻として通っています。どうして“悪妻”と言われるようになったのか？ その真相も分かりますよ。機会があったら、ぜひ小説以外の漱石に関する本も読んでみてください。

